

# ○ビャッコイの原産地 (本田正次) Masaji HONDA: Note on the type locality of *Scirpus pseudo-fluitans*.

清水伝吉氏から昨年 11 月 9 日付で、ある願用の御手紙をいただいた中に次のような一節があり、一般に知られていてもよいと思つたので、同氏の承諾を得て本誌に公表することにした。

「私が中学一・二年の頃私の義兄の別荘のある池やその隣の不動沢という清水の湧出している処で莎草科一種をとりました 私と私の甥の鈴木貞次郎と二人です ここは福島県白河市の北三里ばかりの金山村です (只今は表郷村金となつております) 私は中学へ入ると共に前記貞次郎と共に植物採集をつづけ一々福島師範の教頭であつた根本莞爾先生に送つておりましたのでこれも同様送りましたしかし他のものは返事が来たがこれは梨のツブテでした 然るに師範の助手をしていた中原源治氏が自分で猪苗代湖畔の戸の口でとつたと牧野博士に送つたので博士は (當時はまだ博士ではありません) 会津だから白虎隊にちなみビャッコイと名をつけ発表されました 私はフシンに思い福島県の植物熱心実星大吉先生とその次男の清の三人でわざわざここへ参りビャッコイをさがしました 半日も探ねてとうとう一本も見つけません 一体ビャッコイは戸の口 (赤井谷地とも申します) などの広々とした水のゆるく流れる湿地にはないので金山では今出たばかりの清水の処にのみあります この別荘は瀬戸原という処にありその池の中及びその近くの夜沼という沼にあります外入山と申す処へ行く道の石畑という近所の黄金川のふちにも私は見つけています 石畑の方はこの頃では絶滅したらしいとの報です 福島大学の教授の方々及び熱心家もどしどし金山へ来たり戸の口を調べたりしたが結局我国では金山のみにあり会津には一本もないことが確認されました ウソが学界に幅をきかせる事は誠に心外であり 根本莞爾先生及び中原氏兩人とも今は物故せられたのでこの点まことに困りますが事情右の如く福島大の先生方も全く確認しておられます」(以上原文のまま)

因にビャッコイの標本は東大理学部で腊葉室には清水伝吉氏が 1926 年 (大正 15 年) に前記金山村瀬戸原で採集されて私が鑑定した二枚の標本と 1953 年同じ “Kanayama” で J. Ohwi, K. Okamoto 両氏が採られた標本と合わせて三枚しか入っていない。ビャッコイの和名は果して清水氏がいうように “ウソが学界に幅をきかせ”, 一方白虎隊に縁のないところに産することが明らかになつても今更どうにもならないであろう。ビャッコイの名に神経を尖らせる人は牧野博士が発表の当時ウキイという和名も公にしておられるからこの方を用いることもできる。ただむしろ問題は牧野博士もくりかえして書いておられるようにビャツコイと *Scirpus fluitans* LINNAEUS との種的關係をもう少し掘りさげて考えてみるころにあるように思われる。

なお上記の経緯と生態条件については小林勝氏が “ビャツコイの産地について”

として福島大学・学芸学部理科報告第4号: 1-5 (1955) に述べておられることを付記しておく。

○マンシユウクロカハスゲ日本に産す (大村敏朗・小山鉄夫) T. OMURA & T. KOYAMA: *Carex Peiktusani* Komarov, newly found in Japan.

筆者の一人大村は昨夏南アルプス豊口山へ採集を試みた際標高 2500 m の石灰岩上にクロボスゲ節の見慣れぬ一種を見出し、之を小山がマンシユウクロカハスゲ *Carex Piktusani* Komarov と同定した。本種は今迄南満洲・アムール・朝鮮の高山のみに知られて居るので日本フロラへの新品である。外形は所謂クロボスゲ式であるが、雌花の鱗片が黒紫褐色でなく淡黄褐色であるので明瞭に区別出来、基部の鞘は紫色である。

本種が南アルプスに出たと言う事は植物地理の上から興味が深い。従来南アルプスには遺存植物と言われるものが若干記録されて居り、キタダケサウ等有名である。之等は極めて不連続な分布をするのが特長の一つで、南アのスゲのうちではクロボスゲ *Carex japonalpina* T. Koyama とセンジャウスゲ *Carex Lehmanni* Drej. が遺存植物の例として挙げられる。クロボスゲに就ては本誌 30 巻 10 号に述べられて居る様に、その分布圏は甚だ不連続に北半球全域の高山上に及びその各地でクロボスゲはそれぞれ種と見ても良い程度に分化して居る。マンシユウクロカハスゲも今度の発見で分布上ではこの範疇に入るものと考えられるに至つたのであるが、之等は一度 (恐らく氷期) 北半球全体或は東亜全域に広く分布したものが、氷河の後退と共に分布圏を縮小して、現在では消極的に石灰岩上に生き残つたものと考えられて居る。斯様な種類はクロボスゲ節や広義のイハスゲ節  $\S$  Frigidae に多い。

*Carex Peiktusani* Komorov in Act. Hort. Petrop. 18: 445 (1901) et in Flor. Mansh. 1: 371 (1901); V. Krecz. in Komar. Fl. URSS. 3: 272 (1935); Ohwi, Cyper. Japon. 1: 315 (1936); Kitagawa, Lineam. Fl. Mansh. 107 (1939); Akiyama, Caric. Far Eastern Reg. 110, t. 99 (1955)—*C. Hancockiana* var. *Peiktusani* (Komar.) Kükenthal, Cyper.-Caric. 395 (1909).

Honshu: Mt. Toyoguchi-yama, Prov. Shinano; on exposed limestone, 2500 m alt. (T. Omura!)—Korea, Manchuria, Amurland.

Last summer, Omura collected this rare sedge which had hitherto been known from Korea, southeastern Manchuria and Amurland only, on Mt. Toyoguchi-yama in the Akaishi Mountain Range. *C. Peiktusani* is well defined by its pale-green perigynia loosely inclosing an achene, tawny pistillate scales (never dark-coloured!) nearly as large as the perigynia and purple basal sheaths. This species is, therefore, unique in  $\S$  Atratae and is quite distinct from *C. Hancockiana* to which variety this species was attributed by Kükenthal. It is interesting that this sedge was found on the exposed limestone in the Akaishi Mountain Range, where remain several relic species, for instance, *Callianthemum hondoense* Nakai et Hara, passively. Geographically speaking, *C. Peiktusani* has the same distribution area with those of *C. japonalpina* (T. Koyama in Journ. Jap. Bot. 30: 313, 1955, var. propr., sub *C. Lehmanni* Drejer.) They might have covered the Eastern Asia extensively in the ice age, but decreased their areas later, with the retrogression of the glacier.